英語名詞句の総合的分析に向けた多元的・動的アプローチ

佐々木　一　隆

はじめに

本稿の主な目的は、複雑で多様な様相を呈している英語の名詞句を総合的に分析するには、語の形態・統語と意味の関係・談話構造・言語発達の観点から多元的かつ動的にアプローチする必要があることを示す点にある。

こうした目的に沿って、I 節では Sasaki(2008) の分析（名詞句の中で主要部名詞を前位修飾する形容詞 nearby を扱った論文）を用いて、形態論、統語と意味の関係、談話構造、英語史と母語獲得に関する言語発達の観点から具体的な分析を紹介する。II 節では、先行研究の議論の典型的な型を紹介し、いずれも総合的な名詞句の分析として不備があることを論じ、今後の改善の方向性について示唆する。III 節では I 節と II 節の議論をふまえ、求められる名詞句の総合的分析の視点を提示する。最後に IV 節で、本論のまとめを行うことにする。

I. Sasaki (2008) の分析方法

1. はじめに

Sasaki (2008) では多機能な複合語 nearby に着目して、その副詞・前置詞・形容詞・名詞としての多様な働きを *Webster's Third New International Dictionary* を参照しながら、形態論・統語と意味の関係・談話構造・言語発達の観点を統合する形で論じている。(1) の対話を見てみよう。

(1) A: How was your weekend?
B: Pretty good. We went to a nearby river for a cookout. (Shiozawa and King 2007: 12)

(1B) において nearby は名詞 river の意味範囲を限定する前位修飾語として可能であるが。これとは対照的に、(2B) の対話では同義語の near は同じコンテクストで用いることができない。

(2) A: How was your weekend?
B: Pretty good. *We went to a near river for a cookout.

しかしながら、near の容認可能性は、興味深いことに (3) のような最上級や (4) のような時を示す表現として用いられると向上する。

(3) She went to the nearest restaurant. (Konishi *et al*. 2001: 1461; Konishi *et al*. 2006: 742)
(4) in the near future (Konishi *et al*. 2001: 1461)

Sasaki (2008) では、こうした複合形容詞 nearby が母語獲得や言語史を含む言語発達の観点からどのようにして英語において可能となり、その結果として形態的、統語的・意味的、談話構造的特性を備えるに至ったかを、Kajita (1977, 1986, 1997), Sasaki and Yagi (2003) などで提案されている動的分析に基づいて概観した。

2. Nearbyの性質

2.1. *Webster's*第３版の定義

この節では形容詞 nearby の性質全体について、*Webster's Third New International Dictionary* で定義されている語義を (5)-(8) のように指摘し、形態論・統語と意味・談話構造を考慮することによって概観している。

(5) 1. near at hand: close by <~ flows a river> <plane lands ~> [副詞]
2. Scot: nearly, thereabouts <sixty miles or ~> [副詞]
(6) close to: hard by: near <put up attractive churches ~ a university—W. L. Sperry> [前置詞]
(7) being or set close at hand: adjacent, neighboring <water from a ~ river> [形容詞]
(8) something produced in the neighborhood—usu. used in pl. <steady market on ... colored eggs ... but ~s were weaker—Jour. of Commerce> [名詞]

Sasaki (2008) では、これら 4 つの定義の中から

(7) に示された nearby の形容詞としての用法に焦点を当て、この語がもつ多元的な性質を 2.2 ～ 2.5 の観点に分けて示している。

2.2. 形態論の観点

形態論の観点から見ると複合形容詞 nearby の構造は次のようになる。

(9) $[_{A}\ [_{A}$ near$]\ [_{Adv}$ by$]]$

ここで注意すべきことは、near が形容詞で by が副詞であると仮定するのが妥当ならば、Williams (1981) が提案している the Righthand Head Rule に従わない可能性があるということである。なぜなら、複合語 nearby 全体として形容詞となる統語範疇は、右側の要素である副詞 by ではなく、左側の要素である形容詞 near が主要部であることによって決まってくるからである。この「形容詞＋副詞」分析の妥当性は (7) に示した語義（'being or set close at hand'）により確認できる。というのは 'close' が形容詞、'at hand' が副詞と見なせるからである。また、形容詞 near の意味がその直後に来る by によって指定・明示されるという意味関係は、easy to understand, pretty to look at, here in Utsunomiya のような例において、easy, pretty, here が主要部でその主要部が暗示する補部が、to understand, to look at, in Utsunomiya としてスペルアウトされる形で後続するという同種の意味関係によって動機づけられているからである。

2.3. 統語と意味の関係

統語的位置には相応しい意味が対応するという観点から見ると、(10) に示された決定詞 Det と名詞 N に挟まれた統語的位置は、前位形容詞の 2 つの中心的な意味（人や物を「特徴づける」、「永続性を示す」という特性）を表すのに最も適切な環境であると考えられる。換言すれば、$[_{NP}$ Det A N$]$ において名詞の前に現れる形容詞の位置は、上述の 2 つの中心的な意味（「人や物の意味を限定する」と「一時性を示したり、時制に束縛されたりすることのない」）を表すのに最も適切であるということである。

(10) $[_{NP}$ Det A N$]$

a. a tall man

b. a nearby river

(10) において形容詞 A と名詞 N は、tall と man と nearby と river のどちらの例からも分かるように、互いに一時性をもつものとして関係づけられていない。この非一時性という特性は (11) に示した事実と対比するといっそう明確になる。なぜなら、N+be+A という言語形式 (N と A の相対的な順序からすると (10) の語順と逆になる) は、時制と結びつく動詞 is が存在する関係で、本質的に一時的な特性を示すからである。

(11) N+be+A (<Subject+Verb+Complement)

a. The man is tall.

b. The river is nearby.

ここで注意すべきことは、非一時性を示す名詞前位形容詞が本質的に一時性を表す述詞としての形容詞よりも言語習得の後の段階で出現し、その出現はよりよい表現を求めるという動機づけに起因していると筆者は考えているということである。こうした考えは Wells (1985) のデータや Sasaki and Yagi (2003) の分析に沿っている。

2.4. 談話構造の観点

形容詞の統語的位置を談話構造の観点から見ると、名詞の後よりも前の方が最も好まれる位置であると考えられる。このことを佐々木 (2007) に挙げられた文脈付きの例で確認してみよう。

(12) Do you need a detailed, over-the-shoulder adviser to keep you on task? Or are you an independent worker who must have space to do your best work? (*U.S. News & World Report*, 2008 Edition, p.10)

(13) During an Episode of Grey's Anatomy, intern Meredith Grey rattles off the five W's to consider when a patient suddenly develops a fever after surgery: wind (pneumonia), water (urinary tract infection), wound (redness and pus in the incision), wonder drug (drug-related fever), and walking (clots in the legs). Such mnemonics are fabled memory devices used by countless medical students over the ages. In that tradition, I've created a mnemonic for students applying to medical school. Before you write that first essay, consider the five P's of a life in medicine: patient, problems, practice, payment, and passion. (*U.S.*

News & World Report, 2008 Edition, p.12)

興味深いことに、(12) において下線部が施された形容詞 independent は補部としてゼロ照応形をとり、名詞の前に生じている。ただし、ゼロでない照応形をとる場合は、代わりに名詞の後 (i.e. a worker independent of such a detailed, over-the-shoulder adviser) に生じることになる。こうした形容詞が名詞の前に現れる傾向は、一定の表現が経済性のしくみによって削除されることと連動しながら、談話構造からの要請により引き起こされる。同様の議論が (13) において下線が施された複合形容詞 drug-related にも適用できるが、この場合はゼロでない照応形が前置詞 to を削除した形で複合語の第一要素の中に編入されている。

同様に、形容詞 nearby が文脈の中で名詞の前で使われている例が見られる。

(14) The pK_a was shifted toward alkaline values when a nearby positive charge (R334) was substituted with neutral or negatively charged residues, consistent with the predicted influence of the positive charge of R334, and perhaps other residues, on the titration of a cysteine at 338. (CFTR: A Cysteine at Position 338 in TM6 Senses a Positive Electrostatic Potential in the Pore, *Biophysical Journal*, April 30, 2007 [Google])

(15) Both phenomena, however, have alternative explanations. Because pluralia tantum nouns are grammatically plural and contain the regular plural suffix, people may analyze these nouns as having the morphological structure of regular plurals (albeit not ones that are composed productively by adding a suffix to a free-standing singular stem). Indeed Bock, Eberhard, Cutting, Meyer & Schriefers (2001), studying the speech error in which people make a verb agree in number with a nearby noun rather than the subject (e.g., The advertisement for the razors were ...), showed that pluralia tantum nouns that are close to a verb induce such errors (e.g., The advertisement for the scissors were ...) more often than do singular nouns (e.g., The advertisement for the razor were ...). (The Dislike of Regular Plurals in Compounds: Phonological Familiarity or Morphological Constraint? by Iris Berent, Steven Pinker, Gila Ghavami, and Samantha Murphy, p. 8, April 30, 2007 [*Google*])

(14) と (15) において形容詞 nearby は談話構造に駆動され、名詞の後に非ゼロ形の補部を（それぞれ a positive charge (R334) nearby the pK_a と a noun nearby the verb という形で）従えて生じる代わりに、名詞の前で用いられている点に注意すべきである。

2.5. 言語発達の観点: 英語史

The Oxford English Dictionary (Second Edition) に基づくと、near、by、near by という３つの語彙項目に関する歴史的事実の概要を述べることができる。各語彙項目に対して、副詞，前置詞、形容詞としての初出の年は、簡単な説明と例文で示されている。例文中の当該形容詞には筆者による下線が付してあるので注意されたい。

(16) near:

a. adverb—c888 [obsolete use]
c1250 [the use leading up to the present]

b. preposition—a1300

c. adjective—1565 [place] (e.g., For that was the next nere water, which he could conueniently use for baptism.)
1849 [time] (e.g., The near prospect of reward animated the zeal of the troops.)

(17) by:

a. adverb—c993

b. preposition—898

c. adjective—c1330 (*Generally*. The opposite of *main*)

(18) near by:

a. adverb—c1375

b. preposition—1456

c. adjective—1858 (e.g., The cows in a near-by field were eating.)

一般にこれらのデータが示しているのは、nearby (near by) が副詞、前置詞、形容詞の使用に関して near と by よりも歴史上後に出現したということである。特に、名詞前位形容詞としての near by

の用法は、関連する単音節語 near に基づいて比較的最近の 1850 年頃に、この単音節語の形容詞用法が場所と時の間で多義性が生じた際に発生したと思われる。このことが示唆しているのは、nearby の名詞前位形容詞用法が、基本的に場所指向の形態素である -by を near に付加することにより、場所と時間に関する near の多義性を解消してよりよい表現方法を達成するために英語史上発生したということである。

3. Nearbyについての動的分析

この節では、Kajita (1977, 1986 1997) などに沿って名詞前位形容詞 nearby の動的分析を提示する。Sasaki and Yagi (2003: 613) で説明しているように、Kajita の文法的ダイナミズムの理論は言語理論に時間軸を組み込み、言語獲得過程のある段階から次の段階へと文法が移行する際の「拡張」を支配する法則・原則を仮定して、言語の多様性を説明しようとするものである。そして重要なのはこうした法則が統語情報と意味情報の両方に言及できるという点である。

形容詞 nearby が名詞の前に生じたことを説明するために、Sasaki (2008) では英語の獲得の中間段階において near と by は獲得されているが、nearby はまだ獲得されていない状況があり、そのために名詞前位形容詞 near の用法が場所と時間に関して多義性が生じていると仮定する。この状況は (16) に示した英語史の状況と似ていると思われる。以上のような仮定のもと、(19) が示すように、基本的に場所指向の形態素である -by を near に付加することにより、場所と時間に関する near の多義性を解消してよりよい表現方法を達成するために、複合形容詞 nearby が名詞の前で新たに使用可能になったと捉えられる。

(19) *near* [ambiguous: place and time] & by (at $stage_i$)
→ *nearby* [disambiguated: place only] (at $stage_{i+1}$)
e.g., We went to a nearby river for a cookout.
(*nearby*= ‘close at hand’, ‘near our house’, …)

ここで注意すべきことは、この拡張がさらに形態論・統語と意味の対応・談話構造の観点からも動機づけられているということである。一つには、人や物の特徴づけや永続性という意味を示すには統語的に名詞の前位置が中心的に用いられるというのが動機づけの一つである。また、複合語が新たに名詞前位用法として出現するのは、英語の形態的条件に則しつつ談話構造によって駆動される首尾一貫性の要請と動的法則の一つである経済性の要請からの帰結である。ここで言う経済性とは既存の仕組みを使ってできるだけ最小限の努力で拡張を行うことを指し、具体的には、すでに存在している near と by に基づいて、新たに nearby という複合形容詞を（談話構造的に了解されているため near の補部を明示しない形で）名詞前位用法とするということである。かくて、名詞前位形容詞として場所指向を示す語である nearby の本質は、動的法則（この場合は、明示化による多義性の回避、表現力の向上、経済性）および形態論・統語と意味の対応・談話構造からの要請の相互作用の帰結として生じたと捉えることができる。

4. 結語

Sasaki (2008) では、複合形容詞 nearby が歴史的・言語獲得上どのようにして英語の文法に導入され、一定の形態論・統語と意味・談話構造の特性をもつようになったかの動的分析を概観した。こうした分析はまだ十分とは言えず、とりわけ英語獲得からのデータによる確認と洗練が必要であるが、新しい複合形容詞の nearby が英文法において動的理由づけにより可能となったという典型例を示すことができたと考えてよい。このような動的に裏づけられた母語獲得過程での個体発生は、形態論・統語と意味の対応・談話構造に基づく要因によって強く動機づけられており、少なくとも理論的には英語史における nearby の系統発生と同様のメカニズムが働いていると考えることができる。

II. 先行研究の不備と改善の方向性

英語の名詞句を総合的に分析するには、構造と意味機能の両面を有機的に統合することが重要である。しかしながら、先行研究を見ると、こうした構造と意味機能の有機的統合が基本的になされていないと判断せざるを得ない。

まずは構造の面を考える。英語の名詞句を構造的に捉えるには、佐々木（2009）が指摘しているように、内部構造のみならず統語的分布も見

る必要がある。生成文法では、これまで内部構造の研究に集中してきたと言える (Chomsky 1970, Jackendoff 1977, Abney 1987, Valois 1991, Schmitt 1996, Alexiadou *et al*. 2007)。一方、Gay (1970) などの例外を除き、統語的分布については顧みられることが少なかったように思われる。統語的分布の考察は言語運用の面が強く、言語能力の解明をめざす生成文法にとって魅力がないかもしれないが、言語能力に関わる面もあり、開拓の余地が残されている。また、一般に英語名詞句の構造的研究は、内部構造を中心にして意味解釈とは独立に進められてきており、意味との関わりの中で構造が語られることはそれほど多くなかった。

次に意味と機能の面に焦点を合わせて考察する。英語の名詞句の意味を解明するためには、統語構造、文中における意味タイプ（個体や事態、主題や着点など）、談話構造の３つの観点を総合する必要があると思われる。しかし、従来の研究では、以下の (20) ～ (22) に示すとおり，これら３つの観点が基本的に互いに独立した形で論じられてきた。

(20) 統語構造の観点

例えば、the tall girl standing in the corner という名詞句では、girl が中心となる主要部名詞であり、その前に形容詞 tall が、その後に形容詞的な働きをする現在分詞表現 standing in the corner が現れて，それぞれが主要部名詞 girl を限定修飾している。また、先頭には指定辞としての定冠詞 the が用いられ、該当する girl が唯一人であることを示している。このように当該名詞句の文字どおりの意味は、Chomsky (1970)、Abney (1987)、Alexidou *et al*. (2007) 等の生成文法研究が示している統語構造（X-bar 理論）に基づいて、主要部名詞と前後の要素を意味合成すれば「すみに立っているその背の高い女の子」という全体の解釈が得られるという具合に論じられてきた。

(21) 意味タイプの観点

名詞句は文の中で用いられ、個体か事態かの違いはもとより、主語の位置に現れるか目的語の位置に現れるかによって意味タイプが異なってくる（Grimshaw 1990 など）。例えば、<u>The Breeze</u> blew into <u>San Junipero</u> in <u>the shotgun seat of Billy Watson's Pinto wagon</u>. (Moore 1992: 3) という文では、３つの下線部が個体を表している点で共通しているが、位置の違いに応じてそれぞれ主題、着点、場所という意味タイプを表している。また、<u>Billy's admiration for the Breeze</u> was boundless. (Moore 1992: 3) という文では、下線部の名詞句は主語の位置に現れて、事態（「ビリーがブリーズを賞賛していること」）を表すと捉えられてきた。

(22) 談話構造の観点

例えば、直前のパラグラフの内容を受けて、次の新しいパラグラフの冒頭で <u>All these procedures and hospitalizations</u> had made him a decidedly lonelier, less confident man than he'd been during the first year of retirement… (Roth 2006: 78-79) という文を挙げてみよう。この文では下線部の主語名詞句 <u>All these procedures and hospitalizations</u> が主題を表すが、その意図する内容は直前のパラグラフ全体を前提に具体化してはじめて「こうした様々な手続きと入院のために、彼が退職時よりも孤独で自信を失う結果となった」という文意が明確になる。このような例では、名詞句の解釈に談話構造の観点（Kuno & Takami 1993, Kempson *et al*. 2001 など）が必要となることが分かる。

こうした先行研究の不備を認識し、佐々木（2010）ではその現状を改善するために、佐々木（2009）で提示された英語名詞句の総合的研究の一環として意味解釈メカニズムの多重性について論じた。筆者は今後もさらにこの考え方を発展させ、Keizer (2007) などが提唱している文文法と談話文法とのインターフェイス研究として進めていく必要性を感じている。

具体的には、英語名詞句の意味解釈については統語構造，意味タイプ，談話構造の 3 つの観点から考察を進め，それらを統合する形で多重的な意味解釈のメカニズムの解明をはかり，最後に応用の可能性を探りたいと考えている。したがって、今後の研究では、以下の (23) ～ (25) の順で進められることになろう。

(23) 英語名詞句の意味解釈に関する事実調査の 3 つの観点

A. 統語構造の観点：

一般に句構造を規定する X-bar 理論（文文

法の一部）に照らして、名詞句の意味がどのように部分から全体へと合成されているかについて、小説、エッセイ、雑誌からの書きことばと CNN ニュースやテレビドラマからの話しことばを資料として用いて事実調査を行う。なお、英語では the fond of music student はまったく許されないが、一定の文脈が整うと the fond of music and angry about wars student は完全に不可能とは言えなくなるという事実がある（Sasaki 2004）。これは X-bar 理論に立脚した文文法の規定が、ディスコースの要請から一部緩和される可能性を示唆しており、こうした事実調査も英語母語話者の助力を得て進める。

B. 意味タイプの観点：

文中の様々な位置で用いられる名詞句の意味タイプの種類と傾向について、A と同一の資料を用いて調査する。また，Given the rapidly expanding role of English in the contemporary world, it is hardly surprising that numerous books concerned with different aspects of English are published every year. (Wierzwicka 2006: 3)（佐々木 2010）という例において、下線部の名詞句は通常 role（役割）が統語上・意味上の主要部と考えられ、その場合は「個体」と見なされる一方で、修飾表現の rapidly expanding が意味上の主要部と見なされ、その場合は名詞句全体が「事態」（英語の役割が急速に広がること）を表すものと考えられる。こうした意味タイプの多義性についても調査を進める。

C. 談話構造の観点：

単一の文の領域を越えて前後の文脈や発話の状況を見た上で、名詞句の意味がどのように解釈されるかについて、A, B と同一の資料を用いて調査する。また、Pustejovsky (1995) が指摘しているが、Book sellers usually prefer cookbooks to textbooks around Christmas. という例における下線部の名詞句は、それぞれの前に selling を補って解釈できる。こうした補いには動詞のみならず主語の意味や発話の状況も関わっており、このような現象も調査対象とする。

(24) 英語名詞句構造の多重的な意味解釈メカニズムの解明

例えば、... I broke into tears — sudden, gulping sobs that overtook me and made it hard to breathe. (*The Best American Essays 2004*, P. 12)（Sasaki 2005）という文の最後に添えられている下線部で示した名詞句は、上述の３つの観点を重ね合わせて解釈する必要がある。すなわち、下線部は主節の後に現れる名詞句で統語構造に基づいて全体の意味が合成されるが、意味タイプとしては主節に対するコメントを表し、ディスコースの観点からは主節への補足的説明の役割を果たしている。こうした意味解釈の多重性を詳細に分析する。

(25) 英文解釈や英語学習のあり方への応用

日本語への翻訳や日本語話者の英語学習への応用を検討する。

III. 求められる視点

II 節では、英語名詞句の総合的研究において、先行研究では構造と意味機能の双方の間で真の統合がなされてこなかった旨の不備について述べた。この III 節では、こうした問題を克服する方向で、研究を進める際の視点について少し述べることにする。

結論を先に言えば、以下の [0] ～ [5] に示した視点が必要である。正確には，[1] から [5] に挙げられた総合文法、生成文法、談話文法、語用論、認知言語学の視点を総合し，それらの視点を、基幹の役割を果たす動的視点（[0]）が繋いで統合するということである。

[0] 動的視点 [基幹]：言語発達（母語獲得および言語変化）に着目

[1] 総合文法：記述に重点

[2] 生成文法：母語獲得結果としての文構造

[3] 談話文法：談話構造

[4] 語用論：言語使用

[5] 認知言語学：比喩を処理

具体的には I 節の 3 で見たように、名詞前位形容詞として場所指向性を示す語 nearby の本質は、動的法則（この場合は明示化による多義性の回避、表現力の向上、経済性）および形態論・統語と意味の対応・談話構造からの要請の相互作用の帰結として生じたと捉えることができる。

文法的ダイナミズムの理論は言語理論に時間軸

を組み込み、言語獲得過程のある段階から次の段階へと文法が移行する際の「拡張」を支配する法則・原則を仮定して、母語獲得と言語の多様性を説明しようとするものである。そして重要なのはこうした法則が統語情報と意味情報の両方に言及できるという点である。これは動的視点を基幹の枠組みとして、「拡張」の法則・原則を通じて母語獲得の事実を説明し、併せて多様な言語事実も扱おうとするものである。こうした姿勢には母語獲得の不思議を説明しようとする生成文法の精神が見られ、同時に言語事実を真摯に記述しようとする総合的文法観（あるいは包括的文法観）も確認できる。さらに、実際の運用面において重要な談話構造や言語使用からの要請、意味機能・比喩といった概念も「拡張」の促進に関与するため、談話文法・語用論・認知言語学の視点も組み込まれることになる。なお、動的視点は、言語の歴史的変化にも適用できるものと思われる。

以上のように、英語名詞句を総合的に分析する際には動的視点を基幹とした多元的な視点が必要である。

IV. まとめ

本稿では、複雑で多様な様相を呈している英語の名詞句に注目し、例えば a nearby river のような名詞句内にある前位形容詞 nearby を総合的に分析するには、語の形態・統語と意味の関係・談話構造・言語発達の観点から多元的かつ動的にアプローチする必要があることを示してきた。これにより、総合的な分析には動的視点を基幹とした多元的な視点が必要であることを論じた。

締めくくりに当たり、本研究の学術的な特色を (23) の記載内容に言及して示せば、以下のとおりになる。

(26) 英語名詞句の総合的研究等（佐々木 2009）の一環として、英語名詞句の多重的な意味に光を当て、その解釈のメカニズムを統語構造、意味タイプ、談話構造の観点から総合的に捉えようとする点が独創的であり、今までに見られない記述的・理論的成果が予想できる。

(27) 文文法としての X-bar 理論による名詞句の規定を尊重しつつも、ディスコースの要請から一部緩和される事例とその理論的意味を追究する点も特色である（23A）。

(28) 23B に見られるような統語と意味の主要部にずれが生じたり、23C に見られるような解釈に補足が必要であったりする点を指摘して、意味の合成性原理の例外を究明する点も特色となる。

(29) 英語名詞句構造の意味解釈に関して詳細な知見が得られるため, 安西（1982）等の線に沿って、日本語への翻訳や日本語話者のための英文法をさらに充実できる。

参考文献

安西徹雄（1982）『翻訳英文法』日本翻訳家養成センター。

佐々木一隆（2007）「英語の統語論と形態論の平行性：ディスコースにおける照応と削除」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 24 号、83-91 頁。

佐々木一隆（2009）「英語名詞句の総合的研究に向けて：日本語名詞句との比較を通して」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 28 号、35-41 頁。

佐々木一隆（2010）「英語名詞句の意味を決定する要因：統語構造・意味タイプ・ディスコースの観点から」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 30 号、33-40 頁。

Abney, Steven P. (1987) “The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect”, PhD dissertation, MIT.

Alexiadou, Artemis, Liliane Haegeman, and Melita Stavrou (2007) *Noun Phrase in the Generative Perspective*, Mouton de Gruyter.

Chomsky, Noam (1970) “Remarks on Nominalization”, in Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*. Georgetown University Press, pp.184-221.

Gay, Charles William (1970) “The Appositive in English: a Transformational Analysis”, University Microfilms, Inc.

Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, The MIT Press.

Jackendoff, Ray (1977) *$\bar{X}$ Syntax: A Study of Phrase*

Structure, The MIT Press.

Kajita, Masaru (1977) "Towards a dynamic model of syntax", in *Studies in English Linguistics 5*, pp. 44-76.

Kajita, Masaru (1986) "From periphery to core: a research strategy", Paper presented at TCEL.

Kajita, Masaru (1997) "Some foundational postulates for the dynamic theories of language", in M. Ukaji *et al*., eds., *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday*, Taishukan Publishing Company, pp. 378-393.

Keizer, Evelien (2007) *The English Noun Phrase: The Nature of Linguistic Categorization*, Cambridge University Press.

Kempson, Ruth M, Wilfried Meyer-Viol, and Dov M. Gabbay (2001) *Dynamic Syntax: The Flow of Language Understanding*, Blackwell Publishing Company.

Konishi, Tomohichi, *et al*. (2001) *Taishukan's Unabridged Genius English-JapaneseDictionary*, Taishukan Publishing Company.

Konishi, Tomohichi, *et al*. (2006) *Sanseido's Dictionary of Present-day English Usage*, Sanseido Co., Ltd.

Kuno, Susumu and Ken-ich Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory*, The University of Chicago Press.

Moore, Christopher (1992) *Practical Demonkeeping*, HarperCollins Publishers Inc.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, The MIT Press.

Roth, Philip (2006) *Everyman*, Vintage International.

Sasaki, Kazutaka and Takao Yagi (2003) "Prenominal Modifiers in English: An Outline of a Dynamic Analysis", *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, Kaitakusha Publishing Company, pp. 612-618.

Sasaki, Kazutaka (2005) "A Communicative Approach to the 'S, NP' Construction in English",『宇都宮大学国際学部研究論集』第 20 号、pp.37-42.

Sasaki, Kazutaka (2008) "A Story of *Nearby*: A Morphological, Syntactico-Semantic, Discourse-Based, and Developmental Perspective", *An Enterprise in the Cognitive Science of Language: A Festschrift for Yukio Otsu*, Hituzi Shobo.

Schmitt, Cristina Job (1996) "Aspect and the Syntax of Noun Phrases", PhD dissertation, the University of Maryland at College Park.

Shiozawa, Tadashi and Gregory A. King (2007) *New Activator*, Kinseido Publishing Co., Ltd.

Valois, Daniel (1991) "The Internal Syntax of DP", PhD dissertation, UCLA.

Wells, Gordon (1985) *Language Development in Pre-school Years*, Cambridge: Cambridge University Press.

Wierzbicka, Anna (2006) *English: Meaning and Culture*, Oxford University Press.

Williams, Edwin (1981) "On the notions 'lexically related' and 'head of a word'", *Linguistic Inquiry* 12, pp. 245-274.

The Best American Essays 2004, 2004, Houghton and Mifflin Company,

Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary, Fifth Edition, 2006, Harper Collins Publishers.

Google, April 30, 2007.

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, Sixth Edition, 2000, Oxford University Press.

The Oxford English Dictionary, Second Edition, 1989, Oxford University Press.

U.S. News & World Report, 2008 Edition. [America's Best Graduate Schools], 2007.

Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged, 1976, Springfield: G. & C. Merriam Company, Publishers.

A Multi-dimensional and Dynamic Approach to the Comprehensive Analysis of English Noun Phrases

SASAKI Kazutaka

Abstract

This article aims to present a multi-dimensional and dynamic approach to the comprehensive analysis of English noun phrases by exemplifying Sasaki (2008), which tells a story of *nearby*—a multi-functional compound which serves as an adverb, preposition, adjective, and noun according to *Webster's Third New International Dictionary*—from a combination of morphological, syntactico-semantic, discourse-based, and developmental perspectives.

The article is composed of four sections. In Section I, we exemplify Sasaki (2008) as a model of the multi-dimensional and dynamic approach mentioned above, and then go into further related discussion in the following sections. Section II briefly shows general problems of the previous analyses of English noun phrases chiefly because they lack a good grasp of their structure and function, and suggests an alternative approach. Section III prospects for the validity of a dynamic approach of overriding importance which crucially refers to each stage of language development, and some other related perspectives. In Section IV we make concluding remarks on the originality of the multi-dimensional and dynamic analysis in question.

For reference, we would like to give an overview of Sasaki (2008) ["A Story of *Nearby*: A Morphological, Syntactico-Semantic, Discourse-Based, and Developmental Perspective," in Tetsuya Sano *et al*., eds. (2008) *An Enterprise in the Cognitive Science of Language: A Festschrift for Yukio Otsu*, Hituzi Shobo Publishing.]. It begins by looking at the following dialog:

(1) A: How was your weekend?

B: Pretty good. We went to a nearby river for a cookout. (Shiozawa and King 2007: 12)

In (1B) *nearby* appears as an adjective which premodifies the noun river and restricts the meaning of that noun. In contrast, a synonymous word *near* cannot be used in the same context.

(2) A: How was your weekend?

B: Pretty good. *We went to a near river for a cookout.

Interestingly, however, the acceptability of *near* will be improved in the superlative form or in the case of semantic restriction on some time expression rather than some place expression.

(3) She went to the nearest restaurant. (Konishi *et al*. 2001: 1461; Konishi *et al*. 2006: 742)

(4) in the near future (Konishi *et al*. 2001: 1461)

Using such data, Sasaki (2008) has given a sketch of a dynamic analysis of how the compound adjective *nearby* comes into existence in the grammar of English developmentally with certain properties of morphology, syntax-semantics, and discourse—along the lines of the theory of grammatical dynamism, as developed by Kajita (1977, 1986, 1997), Sasaki and Yagi (2003), *etc*.

（2011 年 6 月 3 日受理）